

2020年1月16日(木)

老球の細道519号

## 県高校新人バスケットボール大会雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

新年早々1月10日(金)～13日(月)まで、会津地区において県高校新人大会が開催された。大会のプログラムを眺めていたら、なんと50年前に私はこの大会に1年生で出場していた。あれから半世紀、幸か不幸か未だにバスケットボールに関わってられる。

50年前の昔話をすると笑われるが、当時の新人県大会は9チームで行われていた。5地区から1位のチーム、開催地区からプラス1チーム、そして前大会の県大会3位までに入賞した地区からプラス1の計9チームだった。県大会に出場するのが大変だったことを今でも覚えている。県大会は3チームで3ブロックに分かれ予選リーグを行い、翌日各ブロックの1位3チームで決勝リーグを行い順位を決めた。

当時私が所属した会津高校はスタメンが2年生1人と1年生4人で、平均身長が170cmもないちびっこチームだった。1回戦はなんとか勝ったが2回戦で優勝した福島高校と対戦したが惜敗。福島高校の当時の主将が県協会現会長の佐藤洋光氏だった。180cmを超える選手がたくさんいて、リバウンドで手も足も出なかったことが思い出された。

ところで、ここ数年福島県は同じチームがトップ争いをしているので、開会式においてネズミ年にちなみ「窮鼠猫を囓む」の諺でアップセット、番狂わせを起こすことを参加チームにお願いした。そうしたところ、会津では男子の若松商業が久しぶりに3位に入賞し、地元開催に花を添えてくれた。女子も会津高校女子が創部初のベスト8進出を果たしてくれた。

全体的に見ると、今まで2年生が中心となって戦ってきたチームが、選手のゲーム経験豊富なところでアドバンテージになっていたが、概してドングリの背比べだったような気がする。トランジションが速く、ディフェンスプレッシャーが強い、そしてリバウンドに積極的に跳びこむ「強いチーム3条件」を満たすチームは多いが、「本当に強いチーム」はもう一つの条件が必要になる。それは「シュートの決定力」である。今大会は驚くべきシューター、驚くべきシュート力を誇るチームはあまり見られなかった。今後の強化ポイントだろう。

来春を迎えると、チームによっては有望な新人が加わるころもあるだろうが、ほとんどのチームは地元出身の「地産地消」メンバーで戦うことが宿命である。隣の家の何かをうらやんでも仕方がない。チームに今いる選手を大事にし、来てくれる選手を大切に育てる以外近道はない。かつて歌手三波春夫が語っていたように「お客様は神様です」は芸能界だけでなくバスケットボール界にも通用する大事なコーチングフィロソフィーである。

現役コーチの頃、来春に向けて闘志を燃やすときに書き留めた宮本百合子の詩がある。

「うらかな春は 厳しい冬のあとに来る

河愛い露のとうは 霜の下で用意された」

ネズミの塩を引く毎日の地道な準備が、来春「窮鼠猫を囓む」チームを輩出させる。